



坂田
金平左平記
四

遠近
1898
4

1898
4



坂田合平右平祀卷之四

目録

- 一 修次山妖鬼付 公平武勇事
- 一 武將出馬付 渡色軍法事
- 一 公平漁獵付 對面新女事

坂田金平左平記巻之四

信濃山妖鬼退治付平左衛門

在程小平左衛門威の人糧系指長下下。白旗執で
辨其。又尺八寸此鬼切。系指と辨し金平火。あ
大馬。後定から事頂。驛と。欺。常に好。後。の。柑
重。二。百。斤。有。多。と。鬼。態。八。枚。又。と。野。亮。の。と。く。力。量。万
丈。小。揚。ら。る。が。軽。く。と。お。擔。只。一。人。ぞ。後。ひ。く。る。云。平。左。衛。門
在。と。右。集。は。夜。は。と。ふ。所。存。の。ま。も。と。と。軍。勢。と。る。連。と
終。城。を。と。り。と。云。持。て。馬。と。子。り。て。お。多。る。と。意。存。の。よ
思。又。招。は。僅。初。と。く。と。定。て。例。の。武。繼。が。軍。は。や。鬼。神。と

つゝの夢若きまると愛し歌る時大心も腸腹で大馬
とて飛越る通方自在此のまじふ縁なきに叶まらぬ
大江に此酒典返活の例ふまらせと所詮あて入るべし
此技を我儘必用也えんぞとて純淨定まも申し
面當りう。い友の互互も夫の典我一人鬼の信盡れ入
たぐへ長百丈の鬼眼も掻抗て必括糸事初の見せ
物よせん多く分被鬼たけ多そ有とをも行端よる
讀法一鬼乃醜附よとて此能者一並く又一並を地
よれた大活盤のえもぞやいそげ八表又人の先とせし
る。二二二二と此ううう。いでそ次ハ義録二年四月と

旬の事もこでひらねる程や志加の心考さう此書
徳波さきゆのけよとら海土小舟。云平んていふ
こま舟よよさんいそい山田を毛の渡一航する。信を
の業と爰義や。渡世障かれば身をもへ便航の叶し
云平ひの技とまひるる下らや。日本一の云平が信か
つる物とやめるとありてに。誠を舟とまふれと
大の眼と信と見物とその光と又のそふみぐと出る。石山寺
は枯の月ゆらにうらうらと。海土大よ恐も櫓楫と也
航し一也航よ良公平持たねと輝やとそ恐あま。云平
は先いと流と流し流よる。云平航よ業航と枕と融て

とおのそのき経候と指してやの海をいひのうも鬼神候
 て人同くし及も牛馬六畜とも捉留するは海をいひぬ
 うんい立所の老れゆく世よ鬼神のやうにせむ全強盜の
 女は集りてを必お押入財宝と捉留し何れも截殺し
 男女と奪取し殺を知らずと経候小城郷と梅切所
 く小大石大木と積るも要ん者くおんいも張中太
 印心のは典者も一の眷属は本を子くや子鬼めて
 毎方自在の曲者くうう一水及びもあ細は終るま
 公平やのそまうち候の事にく有べし信病を極る
 妙系が鬼らふふは標してふとひぬゆゆでの上

耳とそらう若流の鬼らうでり妙をよとてそ若本
 とやん船を大と廻大地を踏たやうも儘直まきと大船
 を捉上げ持却て船屋よそるま馬は鞭打無所若れ
 姫や飛越るもそ若らう行づき先と向とまて一村後り
 たら表れ産よ大木大石とつつかさひ。天取鬼取の若たう麻指
 の皮と着し紐靴を捉持けらる。公平やも終る馬と
 被へ系殺し例の珠指捨んで形定くととらる。鬼を
 是と刀らうより大木大石と取のどく小抽りうら。公平は
 をらうく夜鬼は似合らる傷やと。投あを大石と中にて
 積らうく。ま回殺す文うさ候の方へえおとくに投



浮子
田舎
松



太平記

四十一

八束
又
付
あ
ら
う

ひ
ま
あ
ら
う

必と。あよまろ鬼を囚ふ。大なるよ。亦。色。傲。然。に。あて
 先。多。ま。び。ゆ。る。鬼。を。討。つ。と。奥。に。さ。う。て。逐。ふ。る。公。平
 幸。騎。天。の。如。く。強。く。鬼。も。入。り。を。捨。抗。義。の。上。り
 嘩。と。投。こ。つ。ま。や。に。敵。鬼。を。ば。ど。の。赤。本。に。け。ま。ふ。か。れ
 ぐ。ろ。も。ま。ま。ま。白。杖。き。よ。さん。の。主。飲。は。は。の。あ。る。こ。ふ
 城。と。橋。へ。橋。を。た。ぬ。我。の。今。糸。の。若。ふ。て。ゆ。め。の。討。つ
 乃。勝。を。う。り。か。ば。切。取。に。く。防。と。て。ケ。極。の。湯。は。極。く
 る。あ。の。の。く。侍。也。若。は。若。忠。よ。一。命。と。ゆ。び。ま
 と。鬼。の。面。と。投。を。流。と。流。一。掌。と。合。て。ぞ。嘆。い。さ。
 公平。う。り。く。と。亦。笑。難。づ。れ。独。鬼。味。わ。る。た。女。を。と

威。ら。強。い。ら。ぐ。火。の。車。公平。と。の。鬼。が。逆。よ。亦。色。の。磁。地
 獄。の。責。と。入。り。んと。信。成。大。石。行。も。い。平。及。持。と。又。六。人。の。登
 人。と。ま。下。ふ。拏。逆。石。と。その。山。と。節。を。ま。で。七。霞。り。逆。血。の
 流。の。ど。く。薄。紙。の。や。う。に。推。卒。や。ま。て。ぞ。死。ら。る。と。る。は。て
 乙。平。の。旗。指。と。あ。る。げ。奥。に。は。く。入。ふ。る。毛。ぞ。例。れ。城。の
 よ。と。あ。る。久。て。若。石。と。ま。を。て。橋。と。一。大。本。と。根。を。ぐ。こ。ま
 ま。れ。柱。と。一。旗。乃。麻。珠。の。環。貫。と。十。文字。に。下。と。入。側。り
 二人。中。此。官。と。殿。母。て。往。来。と。因。ら。る。大。石。と。立。を。て。西
 こ。も。で。棄。め。た。と。ど。と。入。る。ま。さ。や。う。は。ま。り。る。公平。を
 を。り。て。物。く。一。や。壁。を。ま。編。際。より。涌。出。と。る。大。石。め。を

何程のりつるべきとありて、
 大木根より一方小丸度ゆり。鉄の費本やつきと折家双べ
 ころ盤石の折泰例小丸さうど。公平が門破よ山高谷埋
 て陰畑却て平地ぬけ勢ふ碎易して待切ふころ
 僅名一人もかく逆失ころ。公平城中小路入奥へけり
 入り道で。そぞ張本等と打見て面は魚像のりつる
 折の事し整たる十人中折まれば女房は砂を少くせ
 員病住者しりし傍あま人のる折と公平志中に
 折度と居り。真肉をいまう大陣を打ぬはと足踏く
 と引更て遠と飲は風しりて家と叩言とこいひ

何程のりつるべきとありて、
 大木根より一方小丸度ゆり。鉄の費本やつきと折家双べ
 ころ盤石の折泰例小丸さうど。公平が門破よ山高谷埋
 て陰畑却て平地ぬけ勢ふ碎易して待切ふころ
 僅名一人もかく逆失ころ。公平城中小路入奥へけり
 入り道で。そぞ張本等と打見て面は魚像のりつる
 折の事し整たる十人中折まれば女房は砂を少くせ
 員病住者しりし傍あま人のる折と公平志中に
 折度と居り。真肉をいまう大陣を打ぬはと足踏く
 と引更て遠と飲は風しりて家と叩言とこいひ

大正の酒典返治より時流本へ生死とあや守ぬるなり。
佛あり鬼と名と籍人を強盗は合とゆふ世よ
ち極やううい公平格の軍事に致し中間めても新
悪ももりよといあはれとある一命と脚下をさくい
立返りべしと頭を地へ付中る。公平せてこそ只今
こまが前めてこそた招り轉落とつひつき。公平初より
と知るがうを必に能く一人民と教害し。ケ招ふ人の妻
子と奪りたり。傍あり人れ振舞。天礎と務とこそを
お述しては公平が一分立どと。上下百人中此邊人と
後編とめて一繩より括あめくと攻くは。望人たへ

大正の酒典返治より時流本へ生死とあや守ぬるなり。
佛あり鬼と名と籍人を強盗は合とゆふ世よ
ち極やううい公平格の軍事に致し中間めても新
悪ももりよといあはれとある一命と脚下をさくい
立返りべしと頭を地へ付中る。公平せてこそ只今
こまが前めてこそた招り轉落とつひつき。公平初より
と知るがうを必に能く一人民と教害し。ケ招ふ人の妻
子と奪りたり。傍あり人れ振舞。天礎と務とこそを
お述しては公平が一分立どと。上下百人中此邊人と
後編とめて一繩より括あめくと攻くは。望人たへ

武將出馬付武獨軍は事

大正の酒典返治より時流本へ生死とあや守ぬるなり。
佛あり鬼と名と籍人を強盗は合とゆふ世よ
ち極やううい公平格の軍事に致し中間めても新
悪ももりよといあはれとある一命と脚下をさくい
立返りべしと頭を地へ付中る。公平せてこそ只今
こまが前めてこそた招り轉落とつひつき。公平初より
と知るがうを必に能く一人民と教害し。ケ招ふ人の妻
子と奪りたり。傍あり人れ振舞。天礎と務とこそを
お述しては公平が一分立どと。上下百人中此邊人と
後編とめて一繩より括あめくと攻くは。望人たへ

一の着属本童子くわひおせむ山所決此計取も定
 て推量一却て仕損どて後代の名とせよと上公平
 追付系名をば中くは保も用いぞ例の我儘ふて法
 下知とせせざる時へ詔使の追信更来りし之はせと
 知彼知已則ハ百戰百勝といふて城大勢成といふ二言
 よるべし其まこと之保の僅若陰積無憂い或保計
 又遠す。追手は徳大者擲手は信代の家人強小守
 と勵む只全致と寫し圖と地て敵とを迷はば城は必攻
 口とせめて本城の守も危あべし。ま盡よきて山大おあ
 五七人の乃もるれ山の尾より懸ひ入詔城とすあべし。

在ふし詔ハ神愛不測の愛地石と死し細と際し叶ぬ
 時を若や若く勇以愛ド毎力自在と盡とべし。ゆめとる
 ちをたくと若く勇以愛ド毎力自在と盡とべし。ゆめとる
 四月中旬大に擲手之方信騎事部を立ては別信ゆめ
 了と後向と軍れし信成と分れは身成と武切の武網
 やく養ぬ若くせしうろろ。先保改は若く法とともれ信と
 押出と。切取取小公平ハ信ゆめ山の強賊百余人一繩小縛村
 冷泪難雨の嫌かり死ぶ必し立く。煙卷をまき強
 有る大お遠よは後ド。あきハ毛庫改とてはるた。煙
 らぬ志ねる若くや。美ハ四天王と始く。敵とす小伸上

けい平も、動身して頃、はなはたしく、其の方と成りて
其威を大にのほ供し、初(凱臨ふ)しりる

公平演説付対面電事

南て去る事、乃ち凱旋し、師、其徳とるし、以て
くらは、今度の凶賊、公平、武勇にあら、其は、返治を
と、も、己が、勇猛、を、誇り、毎、軍、令、小、治、を、乞、ふ、おの
り、ら、也。ま、と、不、慮、の、過、り、ば、拵、と、違、を、蓋、さ、か、じ、
る、車、此、度、ハ、後、車、此、戒、也。激、し、ら、れ、る、ま、ま、一、旦、閉、門、
附、べ、し、以、立、後、高、く、を、去、後、致、て、亦、り、公平、
其、面、一、は、後、の、執、り、後、一、皆、つ、を、閉、物、事、穩、便、に、致、
す、

其、清、茶、の、義、ハ、追、討、未、也、す、べ、し、と、云、ま、る、也。其、庫、頭
不、興、言、小、治、所、と、立、腹、と、い、ら、ず、斜、眼、し、我、屋、と、し、
攻、多、切、て、帝、号、を、を、討、者、より、体、息、の、一、瞬、給、り、
流、死、す、は、は、あ、り、と、拵、ん、小、久、保、村、友、長、沼、文、治、藤、村
一、等、は、其、其、紙、吸、取、れ、し、り、く、帝、号、を、取、り、君、上、ら、ま、ハ
其、つ、り、何、れ、と、い、ふ、を、皆、穩、便、の、以、以、治、給、べ、し、と、恐、入、て
そ、中、亦、也。公平、大、は、無、出、仕、を、し、し、一、ハ、体、息、又、あ、ら、ま、
百、民、の、我、懐、誠、信、を、一、人、し、て、其、以、は、返、治、し、た、ら、
不、忠、を、い、は、向、後、り、と、い、く、大、和、と、い、ふ、一、古、後、也、と、君
親、臣、事、士、女、の、い、ま、ま、は、其、親、事、事、冠、雉、言、の、い、す、く、く、
す、



日本一の公平が不忠不義をまゝめよと作人より怪しむ
大悪を糸糸し竹や又治うえや面くとう信別文意
を日ぬたは登二十餘日よ及る。三人の若たは唯級和
乃使ぐくゆんさく来アに教日るもて法所乃
はとせざりし。何れ我唯とてゆんし。あれど
積たとまは珠棒と振まう大勢よ。公平がふ不祥也
とつこは登口はとゆんといふ言ひふ卒なは珠棒と
載んて麻を振まう。再りてとゆんし。振まをせ
三人の案へ人の地とゆ。○た之案と振くやあり。い
面白は裏と折行し。ふぬゆんし。をよは深の面白き

ふたりて又海島をぞ知る。或は公平の大海は研
法あ後も知るとゆらる。三人の志を二ふ不忠不
てゆらゆぞと知らる。ゆらふは(あるべ)計の
途よ度とゆらる。鬼と一車に乗く巫の之使を渡
とへち指入内とやまきと流し流る公平は身
ふ不忠不義の事面白くもあり。長谷又居やも
るは。さん世との現愛生のいふふ。まや海中の事
うんやと中事よと。何れがくやる。公平は
うんやと中事よと。未知の事より深と迷言と極
と一それと不忠不義の極點と折よせと。つ事おし。

云々海の中へ竟らんも世あるものなれば少く心から来る
 元來新女の後は宿事海産の古菓のやうにして幸紀
 別へ小久味産の地産もは倍立紙て珍貴物もあつた
 又一魚の青いいでせ多くと打立らる。んてこの新養と思
 へども音といふ例乃孫梅の思へは後よ付てあつた。
 紀初よるまで和奇の浦ふ赤浪海上と泳ぐ。御遊
 て泳りゆく。そしてはゆる行男波芦色の田路れ喜
 啼てやよ連海に面入る。お清らるを仕立して居
 たり。公平ひらるへ来海中ふて好くきまあふ
 ぬ百も子も抱て来一。は色をへ能活の用さして待

久と皆露形はあて優々たる海中に飛入る。んてあ
 やし行津と音でち居る。稍二回中あて公平仲のあ
 浮も出波の上と泳ぐ。まねと見やまぬ山のて
 多れ大魚と腹の大隈を括合行へ引をよらる。ん
 獲る毛と入る小先又十の鯨鯨一本。之り釣れ鯨を
 二とらの鯨鯨二。獲る長も此れ鯛之扱。まねあひ
 小魚較と知れどら上る。公平哲思とほき。来海中ふ
 飛へにやいひふや乃波煙の波と凄優くとか入
 本下とカヤとをなもねもねかやうと知ぬ海産を
 いづくに魚の有へきごと彼あはれと釣る。波の喜大ふ

卵音らうくと湯きこり茶麩のどし。柵らるそ波の鳴
波新定のをあめり。席は新ま城よ入て母れ純女あを封
面をくしとあひ。せ三きこよあきで。一乃橋門わら。是よ
つ。遊もろく。廣き砂地持もろ。あれあしあらんそ
終よん別れ。泉敷の形と頼よ敷らる左が敷十人あを
んく。云世の入清らるそ。そ敷らる事際や。角
て。門内よ入も。色を城よ新ま城とそ。く。瑠璃の
砂原。玉れ。梵。暖みで。あ。花。自。續。終。た。る。朱。樓。坐。殿
玉乃探干る。徳の瓦。珊瑚の梁。金の。瑠。璃。の。柱。七。宝。と。瑠
璃。観。音。摩。未。曾。て。同。み。と。刀。を。身。あ。と。ま。ざ。り。し

不也。傾。更。ま。く。母。れ。純。女。紅。の。袴。小。柳。裏。の。又。瑠。璃。玉。の。瑠。璃。光
と。無。一。敷。ま。の。幞。女。は。湯。道。彫。く。そ。て。出。な。る。う。ろ。り。や
と。座。敷。も。と。と。平。造。く。あ。ひ。は。系。何。と。て。う。れ
ら。を。ひ。し。今。れ。初。終。と。結。く。小。室。へ。ん。は。素。直
偏。の。乃。小。丘。あ。い。ぬ。よ。あ。う。び。は。あ。よ。な。り。母。の。口。月。小。か。る
ち。し。そ。不。思。儀。な。き。純。女。悦。び。さ。も。あ。く。は。孫。と。は。ま
中。に。還。る。し。も。慰。し。意。で。系。と。い。う。孫。又。七。日。も
滞。り。て。八。日。新。ま。あ。を。獨。し。又。八。日。中。に。お。宿。も。あ
月。初。一。若。て。れ。初。終。よ。せん。又。初。り。け。け。う。大。地。の。二。之。足
も。し。ほ。く。み。や。ふ。せん。と。あ。ひ。く。孫。く。假。初。よ。入。り。て

又七日も帰らざるに在り。又云平が彼は備へ
あんと風をせば口惜るべしと云ひ、殊に
立出さず不意の玉を後さすといふ所、奪取の計にて
面を不肯の玉を後さすといふ所、奪取の計にて
増え入るに教へし累敷るに、海軍の計にて
一取あつてあつていひ傳ふるに、本慮脱也といふ日本
めくも、海軍と知らるる所、海軍の志、
形り、さす玉に、海軍といふ所、奪取の計にて
仕いと、二度日本へ、海軍といふ所、奪取の計にて
ハ、その時の玉に、海軍といふ所、奪取の計にて

中へき、海軍といふ所、奪取の計にて
形り、さす玉に、海軍といふ所、奪取の計にて
仕いと、二度日本へ、海軍といふ所、奪取の計にて
ハ、その時の玉に、海軍といふ所、奪取の計にて

坂田金平右平記之終

